

# 沖縄戦における野戦重砲兵 23 連隊の動向と 戦後の慰霊碑建立と慰霊祭の報告

田口 恵

## はじめに

那覇市歴史博物館（以下、「歴史博物館」）では、2017年4月28日から6月27日まで企画展「戦地からの便り 伊藤半次の絵手紙と沖縄戦」を開催した。その際には、伊藤半次の絵手紙と沖縄戦との関わりを中心として展示をおこなった。その、人物である伊藤半次とはいったいどのような経緯を経て沖縄戦で闘っていったのか。まず、伊藤が生まれてから野戦重砲兵 23 連隊に入隊し、沖縄戦でなくなるまでの経過を紹介する。

伊藤は、1913年に福岡に生まれ老舗提灯店の提灯職人として働いていた。1940年の27歳のときに召集され、福岡県小倉の野戦重砲兵に入隊。翌年、関東軍として満州へと移動する。1944年10月下旬に沖縄守備隊第32軍の軍直属の野戦重砲兵 23 連隊通称「球 3109 隊」に所属し沖縄戦で戦うも1945年6月18日に糸満の大渡で戦死したといわれている。

企画展では、伊藤が戦地から送った絵手紙の紹介が中心に行われたが、歴史博物館では、この伊藤が所属した沖縄戦における野戦重砲兵 23 連隊について部隊の動きを含めて展示を展開していき、沖縄戦を紹介することを展示の柱においた。そこで、この軍直轄部である野戦重砲兵 23 連隊（以下、「野重 23 連隊」）大まかな動向について展示や図録にて紹介したが、部隊の詳細な動向まで紹介することができなかった。

そこで、今回、展示会にて紹介することのできなかった沖縄戦における野重 23 連隊の下部にある中隊の動向をこれまでに発行されている資料や聞き取りから時系列にまとめてみた。

また、この展示会終了後、戦後の野重 23 連隊の関連史料として、慰霊碑の建立と慰霊祭に関わる史料が歴史博物館へ寄贈された。沖縄戦後、この部隊の生き残った戦友会が中心となり、慰霊碑を建立し慰霊祭を行って行くのだが、その経過が、これから戦後史として今後必要となっていくであろう。その資料の紹介を行うことで、戦後 73 年間の一部隊の記録となればと考える。

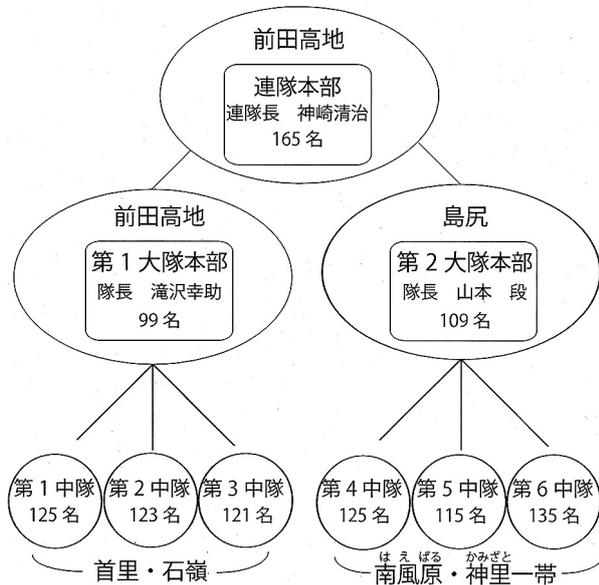
## 1、野戦重砲兵 23 連隊の部隊と動向

野重 23 連隊は昭和 17 年 4 月 25 日に満州国東満総省梨樹鎮において編成、部隊は陸軍大佐神崎清治以下約 1000 名の部隊からなっていた。昭和 17 年 10 月 18 日には同省の八面通に移駐。八面通付近を警護。昭和 19 年 8 月 31 日に沖縄守備隊の第 32 軍の軍直轄部隊としての動員下令、10 月 22

---

たぐち・めぐみ：(那覇市歴史博物館 非常勤古文書解読員)

日に那覇港着。通称「球 3109 隊」。23 連隊の隊長は神崎清治、人員は約 1000 名。組織は連隊本部と二つの大隊、下部に 3 個の中隊からなっていた。このことについては、すでに、図録<sup>(1)</sup>や展示史料で紹介したが、確認のためにその組織図を以下に示す。



『日本軍の沖縄作戦』(月刊沖縄社 1985)をもとに作成

図1 野戦重砲兵 23 連隊の組織図

戦闘経過は昭和 19 年 10 月 22 日那覇港着。連隊本部は前田高地に守備陣地をおき、第一大隊は首里を基幹とする石嶺周辺に陣地を構築。第二大隊は島尻地区に陣地を構築。昭和 20 年 4 月 1 日中旬には嘉数高地、前田高地にての米軍と日本軍との激しい戦闘が行われて第一大隊は壊滅的な打撃を受け多くの戦死者をだす。残存兵を率いて南部へ撤退。第二大隊は十分なる兵力をもって攻撃を行っていた。昭和 20 年 5 月 22 日米軍の猛烈な攻撃により軍司令部南部撤退を決定。そのことで、第二大隊も八重瀬岳に転進。昭和 20 年 6 月中旬第一大隊残存兵と第二大隊の最後陣地小渡に集結。集結当時、使用可能な火炮はわずか 2 門であった。6 月 19 日、部隊解散<sup>(2)</sup>。野重 23 連隊の戦闘記録からおおまかな部隊の戦闘経過は以上である。しかし、これまで野重 23 連に関する史料として以下の 5 点の聞き取り史料や沖縄の防衛隊として参戦した翁長朝義の手記などがある。その史料からその部隊の中隊の動向を時系列に以下の表にまとめてみた。

- ① 元 23 連隊第 2 大隊 5 中隊長金子晃氏の聴取資料 (『32A を中心とする日本軍の作戦 付録』陸上自衛隊幹部学校 1960)
- ② 第二大隊第 4 中隊防衛隊員翁長朝義の手記 (『沖縄戦一防衛隊員の手記』翁長朝義 1988)
- ③ 「第 5 野戦重砲第 23 連隊史」(『沖縄作戦における 32A 主要直轄部史実資料』陸上自衛隊幹部学校 1960)
- ④ 『戦地から愛のメッセージ』伊藤博文 文芸社 2014
- ⑤ 「野戦重砲兵 23 連隊史」(『日本軍の沖縄作戦』月刊沖縄社 1985)

表1 野戦重砲兵23連隊の動向

日付	部隊の行動
昭和15年 9月 1日	野戦重砲兵第五聯隊(小倉)に入營④
昭和15年 9月 1日～ 昭和15年12月 1日	西部七十二部隊(久留米師団)④
昭和16年 7月16日	3109球 野戦重砲兵第23連隊 編成
昭和16年 8月～ 昭和17年 4月	満洲国東安省密山県斐徳第938部隊(峯岸隊)④
昭和17年 4月25日	東満梨樹鎮において編成④
昭和17年 4月～ 昭和17年冬	斐徳より牡丹江省梨樹鎮へ移動 第3109部隊(山田隊)④
昭和17年10月18日～ 昭和19年秋	梨樹鎮より牡丹江八面通へ移動第3109部隊(山田隊)④
昭和19年 7月20日	満洲八面通から本隊は19年10月22日上陸③
昭和19年 8月31日	動員下令③
昭和19年 9月 1日	駐屯地出發③
昭和19年10月22日	野戦重砲兵23連隊、那覇港着。中頭、島尻郡の整備。連隊本部は前田高地に陣地を構築。第一大隊の陣地は1中隊は西原の幸地。2中隊は池田。4中隊は大里の平川。5中隊は南風原神里。6中隊は東風平の屋宜原。③⑤
昭和19年11月 6日	5中隊主力より遅れて那覇に上陸。神里付近の陣地を選定を命ぜられる。当初は首里と与那原の間、続いて小禄と糸満の間、さらに港川に対する射撃を準備した。他の中隊は洞窟を作り、洞窟内から射撃が行えるように設備を行った。①
3月 7日	4中隊、神里にて道路補修工事。陣地壕の構築。②
3月20日	4中隊長より戦闘突入の宣言。②
3月23日	米軍の上陸前の空襲と艦砲射撃が激しくなる。②
昭和20年 3月24日	甲号戦備下令③
昭和20年 4月 1日	第一大隊は北正面を第二大隊は港川方面の攻撃を配備。③
昭和20年 4月 4日	第一大隊初弾発射③⑤
4月 5日	第二大隊初弾発射。与那原西南側に転進。石部隊東海岸の戦闘に直接協同。③⑤
4月上旬	4中隊は南風原の宮平に砲列を敷くために砲1門と弾薬運びを行う。大名、宮城にある弾薬倉庫から運び出す。② 第一大隊の陣地1・2・3中隊は首里を基幹とする石嶺に陣地を構築。⑤
4月中旬	4中隊は砲撃を開始。その度に防衛隊は砲弾の補充。②
昭和20年 4月26日	第二大隊は東海岸において津覇、和宇慶、上原、棚原の線に前田高地防備に敢斗。③
4月下旬	4中隊の神里の壕が直撃をうける。防衛隊の壕も米軍機によって投下された爆弾により直撃。② 第一大隊は壊滅的打撃。第二大隊はまだ健在で十分なる戦力を持ち、陣地を変換しながらさかんに射撃をくりかえす。⑤
昭和20年 5月10日	第二大隊は首里 人員多く戦死③
5月中旬	4中隊、米軍の大空襲により神里が炎上②
昭和20年 5月27日	軍司令部首里転進とともに八重瀬岳、与座岳に転進す。第一大隊第2、3中隊は破壊。第二大隊は転進部隊掩護戦闘を神里、東風平、糸数、新城、志多伯に実施。5中隊は神里陣地を放棄して、残った砲1門を牽引車で運び与座(糸満市)に移動。②③
昭和20年 6月 6日	軍司令部南部撤退により第二大隊も八重瀬岳に転進す。第二大隊の4・5・6中隊は各砲1門となる。⑤⑥
昭和20年 6月19日	八重瀬岳観測所包囲せられて戦闘不能に陥る。小渡に集結、同夜部隊長を先頭に斬込を敢行す。小渡にて部隊解散。③⑤⑥

表の日付については、日付がわかるものは記載し、わからない部分は初旬・中旬・下旬に区切った。

## 2、野戦重砲兵 23 連隊の慰霊碑建立と慰霊祭

野重 23 連隊の慰霊碑は二箇所あり、場所は糸満市大渡と那覇市首里久場川町である。糸満市大渡にある慰霊碑は野重 23 連隊の全体の慰霊碑で昭和 53 年に戦友会によって建立された。又、那覇市首里久場川町にある慰霊碑は第一大隊の第 2 中隊（浜田隊）の慰霊碑で、これは第 2 中隊の浜田隊の戦友が建立したものである。

糸満市大渡にある慰霊碑建立と慰霊祭については、その当時の史料を戦友会の遺族であり現在、静岡県に在住の川内義子さんに提供していただいた。川内義子さんの父、川内金市氏が伊藤半次と同じく野重 23 連隊に所属し、おそらく伊藤半次と同じく第一大隊に所属していたであろう。川内さんは第一大隊の第 3 中隊に所属していた。この川内さんの情報については、伊藤半次の孫である伊藤博文氏が歴史博物館で展示を行った以降に繋がった縁で私も情報を提供していただくことができた。伊藤半次と同様に川内義子さんも父である川内金市氏から満州と沖縄から書簡を受け取っている。その書簡も伊藤半次と同様に沖縄から最後に終わっている。伊藤半次の絵はがきとは対照的で家族への思いがびっしりと文字に認められたものであった。この書簡から当時の満州での戦況の状況や部隊の動向を知る手がかりになると思われる。しかし、今回、私が注目したのは、この慰霊碑建立の経緯を示した文書や慰霊祭の状況の写真である。

また、もう一箇所の慰霊碑である那覇市首里久場川町にある第一大隊の第 2 中隊の慰霊碑建立と慰霊祭には久場川自治会と第 2 中隊の戦友会や遺族の方との詳細な記録が存在する。慰霊碑が建立された当時は久場川老人会がこの慰霊碑を管理しており、その会計簿や野重 23 連隊第 2 中隊の戦没者名の名簿が当時老人会の会長をしておられた前原穂積氏から歴史博物館に寄贈された。野重 23 連隊に関する寄贈は「昭和 56 年から平成 20 年にかけての慰霊碑の修繕や慰霊祭の記録簿 1 冊」、「野戦重砲兵 23 連隊第 2 中隊 浜田隊 沖縄戦々戦没者名簿」、「久場川自治会長宛書簡 3 通」である。特に記録簿は、ほぼ毎年行われた慰霊祭を行うにあたっての供養品の収支や参加者の名簿、また供養料など記録しており、慰霊祭の記録として貴重なものである。

以下この二箇所の慰霊碑と慰霊祭について報告する。

### (1) 野戦重砲兵 23 連隊の慰霊碑（大渡）

野重 23 連隊の全体の慰霊碑は現在の糸満市大渡に建立されている。糸満市大渡への建立はこの連隊の終焉がこの地域であったことによる。

昭和 53 年に戦友会によって建立された。その経緯を今回、川内義子さんのアルバムのなかの戦友会や遺族にあてた「慰霊碑除幕式について」の案内文で確認することができる。当初は敷地問題で難航していたが、糸満市が無償で

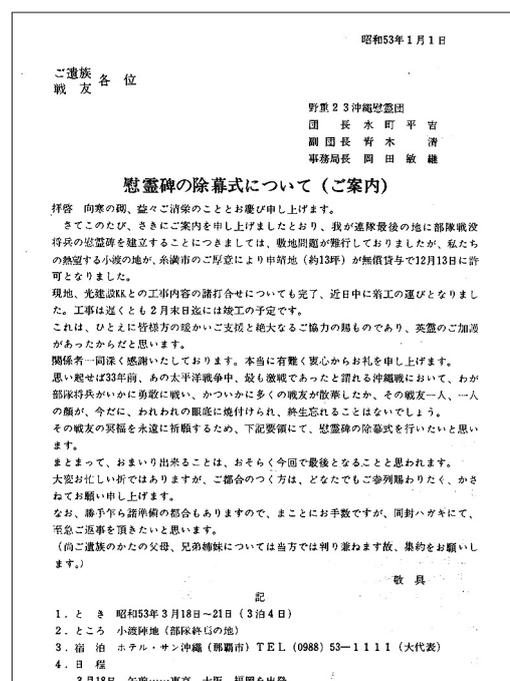


図2 野戦重砲兵 23 連隊の慰霊碑除幕式の案内文

譲渡してくれることになったこと。また、工事業者の名前、それと、除幕式の開催を示す文書が残っている。また、これが戦友会がまとまってお参りすることが最後になることであろうと伝えている。ちなみに、現在、糸満市にこの慰霊碑の土地の無償譲渡の件について聞いても当時の状況を示す文書は探せないという。

この除幕式の状況の写真も数枚残されており、その時に状況もつぶさにわかる。

実はこの野重 23 連隊の慰霊墓参団は昭和 52 年に最初に行われ、その時点では慰霊碑は建立されておらず、首里の中央納骨堂で行われている。



図3 昭和52年慰霊祭（首里中央納骨堂にて）

その翌年昭和 53 年 3 月 18 日～21 日にかけての慰霊墓参の旅を計画し、除幕式（19 日）を含めての墓参の様子の写真も残っている。



図4 昭和53年3月19日 慰霊碑除幕式

この慰霊碑のモチーフであるが、野戦重砲兵になぞられた重砲が慰霊塔の両脇にあり、その中央には「力」という石碑がある。この「力」は部隊長である神崎清治少将の神崎の頭文字である「力」をとったということである。

このような、慰霊碑のモチーフについても記録しておかなければならない。たとえば、同じく慰霊碑の宜野湾市にある「京都の塔」について京都の石材を使用して建立したの詳細が報告されてい



図5 野戦重砲兵 23 連隊の慰霊碑  
(両脇に重砲と中央には「力」の文字)

いうことである。

## (2) 野戦重砲兵 23 連隊第一大隊 2 中隊の慰霊碑 (久場川)

野重 23 連隊第一大隊 2 中隊の慰霊碑は那覇市首里久場川町にある (図 6)。この慰霊碑も第 2 中隊がこの地で闘ったことによるとともに、この久場川町には久場川(クバガー)といわれる井戸があり、この井戸によって多くの兵士が命を救われたことによる慰霊碑の建立であろう。

この第 2 中隊の慰霊碑は昭和 55 年に建立されている。この慰霊碑建立について詳細な文面は残っていないが、この慰霊碑の管理を現在でも行っている久場川自治会によれば、やはり、第 2 中隊がこの井戸の水によって命を助けてもらったことによるだろうということである。

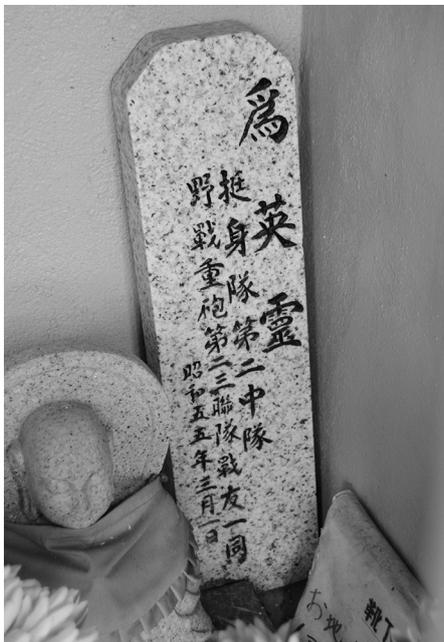


図6 野戦重砲兵 23 連隊第一大隊  
2 中隊の慰霊碑 (首里久場川町)

そして、この第一大隊の第 2 中隊の慰霊碑は先にも述べたように久場川自治会との合同で慰霊祭が行われており、その詳細な記録簿が存在する。

る (3)。

その後、慰霊祭は昭和 56 年まで毎年慰霊墓参団を結成し慰霊の旅をしている。しかし、その後は、戦友会でのまとまった慰霊祭は行われることはなく、個人での慰霊となっていく。

そして、現在では、戦友の方はほとんど亡くなられており、遺族の方も高齢となっているのが現状である。当時は大渡地域の方も参加して慰霊祭が行われていたと



H.15.4.20 虎頭会主催 慰霊祭  
読経するのは 万松院 松久禅師

図7 平成 15 年 4 月 20 日 慰霊祭 (久場川町)

以下、その管理記録簿を年度ごとに整理してみた。

表2 野戦重砲兵23連隊第一大隊2中隊の慰霊祭の管理記録簿

月 日	記載内容	参加人数
昭和55年	慰霊碑建立	
昭和56年 4月18日	球部隊野戦重砲兵第23聯隊永代供養協賛者名簿	16名
	寄付者名簿	12名
昭和59年 4月10日	慰霊祭参加者	
	戦友	11名
	御遺族	11名
昭和59年 4月1日～ 昭和60年 3月	慰霊祭 出納簿	不明
昭和60年 4月1日	慰霊祭 出納簿	不明
昭和61年 4月7日	慰霊祭 領収証綴	不明
昭和62年 4月6日	慰霊祭 領収証綴	不明
昭和63年 4月5日	慰霊祭 領収証綴	不明
平成1年 4月3日	慰霊祭 収支明細	不明
平成2年 4月10日	慰霊祭 収支明細	不明
平成3年 4月8日	慰霊祭 収支明細	不明
平成3年 7月9日	お中元代として領収証	
平成4年 3月2日	久場川(井戸)の工事費として 収支明細書	
平成4年 4月5日	慰霊祭 収支明細	不明
平成5年 4月12日	慰霊祭 収支明細	21名
平成6年 4月4日	合同慰霊祭 収支明細	21名
平成8年 4月8日	合同慰霊祭 収支明細 虎頭会	5名 15名
平成9年 4月6日	野戦重砲兵第23聯隊戦没者供養団は来沖できず。(戦友会代表の山崎氏の手紙があり)老人会と自治会の共催で慰霊祭を挙行。	
平成10年 4月14日	合同慰霊祭収支明細 久場川老人クラブ虎頭会	6名 25名
平成11年 4月6日	戦友会代表の山崎氏他3名が来られたが、慰霊祭はできず、参拝のみで帰る。	3名
平成12年 4月5日	山崎さんが個人的に来訪 供養料を納める。	
4月16日	第23連隊関係者は来県されず、虎頭会主催で慰霊祭を挙行	20名
平成13年 4月9日	山崎氏他1名が来訪され参拝される。合同慰霊祭を久場川デイサービス利用者10名で行う。	10名
平成14年 4月7日	山崎氏と金井氏がみえて久場川自治会及び老人クラブ虎頭会の合同慰霊祭を行う。 虎頭会	14名
平成15年 4月20日	山崎氏来沖できず、久場川老人会虎頭会で慰霊祭を行う。その模様を写真撮影。戦友の方へ送付する。	
平成16年 4月4日	山崎氏ら5名(合同慰霊祭) 老人会 合同慰霊祭 写真(2枚)	5名 12～13名
平成18年 4月11日	山崎他3名が来沖。雨の中慰霊祭を行う。	3名
平成19年 1月16日	球部隊野戦重砲兵23連隊第2中隊の永代供養協賛会の田治俊治の長男俊孝さんが長男をつれて慰霊碑の参拝にくる。慰霊碑を案内する。永代供養料をいただく。	2名
平成19年 2月6日	慰霊堂のペンキの塗り替えを行う。経費は関係者より頂いた供養料より使用する。 工事関係の費用を寄付金をいただく。	
平成20年 4月15日	山崎氏ほか3名参拝にみえる。 久場川老人クラブ虎頭会	3名 7名

この記録からもわかるように、慰霊祭が、ほぼ毎年行われていることが確認できる。収支報告の明細について詳細は記載しなかったが、出費は慰霊祭の際の供物や供養参列者へのお土産代、慰霊祭が終了後の懇親会の料理代となっている。また、慰霊祭に参列できなかった年には、自治会だけで行った慰霊祭の様子を写真撮影し、それを戦友会の方に送付する通信費などにも利用している。

また、平成19年度には慰霊堂の修繕費にも利用されている。そして収入は戦友会からの供養料となっている。

このように、久場川老人会と戦友会の人々がやりとりを行っていたことが、この行事、出納簿からうかがい知ることができる。毎年4月の上旬から中旬にかけて慰霊祭を行っていること。また、慰霊祭を当初は、戦友会と遺族の方と久場川老人会の合同で行っていたが、戦友会と遺族の方が高齢になったため、久場川老人会が主催で行うことになったこと。供養料で慰霊碑の修繕や維持を努めている

ことが確認できる。

平成20年度以降はこの記録が存在しないのであるが、それは、老人会長である前原氏の後退とともに、戦友や遺族の高齢化に伴い、慰霊祭自体が自治会の主催の10月に行われている地域の年中行事にあたる「ウマーチの御願」へと移行していったことによる。このウマーチとは、久場川自治会のおこなっている年中の祈願の一つでこの久場川の発祥に関わる井戸を拝む祭祀である。現在の自治会長である泉川宏氏によれば、久場川の発祥に関わる井戸を拝むという久場川の年中祭祀と野重23連隊の兵士たちがこの井戸によって助けてもらったという感謝への気持ちが繋がることであると、自治会では、今後もこの23連隊の慰霊碑を供養し続けるということである。

## おわりに

伊藤半次と沖縄戦による展示会で紹介することのできなかつた23連隊の動向を残っている資料から整理することで部隊の行動をまとめてみた。紙面の都合上、詳細な証言などをまとめることができなかつた。また、今回は触れることができなかつたが「第二大隊第5中隊の陣中日誌」が内閣府のホームページ上にてPDFで公開されている<sup>(4)</sup>。この資料も昭和20年1月から2月末までの期間であるが、部隊の動向を知る上で貴重な資料であると思われる。今後はこのように残された資料をつきあわせていくことでより詳細な動きが浮かび上がってくるのではないかとと思われる。今後の課題である。

慰霊碑や慰霊祭については、沖縄戦終結後終戦の焼け野原から真和志村民が遺骨を収集し慰霊碑を建立した「魂魄の塔」などをはじめ建立し続ける。その後、戦友会や地域の方などにより慰霊塔・碑は次々と建立されつづけた。それは、現在でも進行形とあってよいだろう。

その慰霊塔が沖縄県によって調査され、全県における慰霊碑、慰霊塔の数が把握できており平成7年の調査によれば、330の慰霊塔・慰霊碑があるという<sup>(5)</sup>。

しかし、その慰霊碑や慰霊塔がどういった経緯で建立され、現在どのように祀られているのか。現在も慰霊祭を続けている団体であればそのことは伝えられている。しかし、野重23連隊のように部隊の兵士がほとんど本土の人々で慰霊祭も途絶えてしまっている今日はこの情報を伝えて残していかなければいけないと思う。

現在ではこのような状況を踏まえて、慰霊碑や慰霊祭についての調査・研究を上杉らの調査によって一部報告がなされている<sup>(6)</sup>。しかし、沖縄県全体の慰霊碑や慰霊祭の状況の全てについては把握できていない。そのような状況を含めてこの慰霊碑・慰霊祭の経緯を記録しておくことは必要なことである。

最後にこの野重23連隊史の資料を快く提供していただいた静岡県在住の川内義子さま、また、その情報を提供していただいた伊藤博文さま、那覇市首里久場川町慰霊碑関係の資料を寄贈していただき当時の慰霊祭の様子をお話いただいた元老人会長の前原穂積さま、奥様の前原秀子さま、久場川自治会長の泉川宏さまに心より感謝します。

- (1) 『戦地からの便り-伊藤半次の絵手紙と沖縄戦』那覇市歴史博物館 2017
- (2) 『日本軍の沖縄作戦』月刊沖縄社 1985
- (3) 奥谷美穂 松田雅美 『『沖縄京都の塔』の石材にみる建立者の意図』沖縄慰霊碑科学研究会 2018
- (4) 内閣府のホームページ「野戦重砲兵 23 連隊第 5 中隊陣中日誌 昭和 20 年 1 月」「野戦重砲兵 23 連隊第 5 中隊陣中日誌昭和 20 年 2 月」
- (5) 『沖縄の慰霊塔・碑』沖縄県生活福祉部援護課 1998
- (6) 上杉和央「沖縄県南城市における戦没者慰霊-旧玉城村・知念村域を中心に-」（『京都府立大学学術報告（人文）第 64 号』2012） 『南風原町』京都府立文学部歴史学科文化遺産学コース 2017 所収の第二部慰霊碑・慰霊祭調査編